

## 先天性内反足 2

座長：大 関 覚

2 題の Ponseti 法による保存療法の結果と、4 題の手術療法の成績が報告された。衣笠は 5 年以上経過した Ponseti 法で治療した先天性内反足のうち 20%に何らかの手術療法が必要であったことを報告した。鬼頭は、Ponseti 法で治療した先天性内反足と、何らかの合併奇形のある非特発性内反足を比較し、ストレス X 線撮影の結果から非特発性内反足の方が矯正が困難であることを明らかにした。眞鍋は、Ponseti 法後に装具療法から脱落し、再発した症例に前脛骨筋腱の外側移行術を行い良好な結果を報告した。貴志は、距骨下関節全周解離術の短期成績を報告し、足関節の底屈角度が不十分であることを問題点として検討した。中瀬は、成長終了期の変形遺残に対し Ilizarov 法を用いて治療し、全例で plantigrade foot を獲得したが、距骨下関節癒合などの合併症も起こることを報告した。町田は、15 年以上経過した距骨下関節解離術を行わない手術療法と保存療法の成績を報告し、いずれも足関節に対して足軸が有意に内旋していたことを明らかにした。また、早期に手術を要した群では、矯正は良好であったが足関節可動域が正常の 50%程度と有意に低下していたことを報告した。Ponseti 法の導入以降早期解離手術は減少したが、歩行開始以後に手術療法を必要とする症例は少なくないことが明らかになりつつあり、手術療法の継承の必要性を感じた。